

付きたい力と評価を共通理解して進める教員集団の形成

- 小学校の総合的な学習の時間におけるモデレーションを通して -

伊藤拓也 (学校経営コース)

1 課題意識

私の経験上、学級担任として学年で総合学習を行う上で、総合学習について学年内で話し合いは行われても、年間指導計画を基にした活動内容のみだった。カリキュラム・マネジメントという視点に立った、子ども像等の計画・評価方法や評価物の検討・カリキュラムをどう修正していくかなどの話し合いは行ってこなかった。その話し合いが行われなければ、クラスごとに活動だけ共通のことが行われ、目指す子ども像等の計画や評価、カリキュラムの修正は学級裁量によって行われることになる。

また、勤務校の総合学習の進め方について実態調査を行うと、子どもの目指す姿や付きたい資質能力について考えられていなかったり、評価について学年で統一されていなかったりといった問題があることが分かった。カリキュラム・マネジメントを行うには、学年全体で目指す姿や評価方法資料を共通理解し、カリキュラムを修正しながら進めていき、子供に付きたい力やその状況評価を共通理解して取り組むことのできる教師集団となる必要があると考えた。

2 研究目的

本研究は、「総合学習において、子どもに付きたい力やその状況評価を共通理解して取り組むことのできる教師集団の形成」を目的とした。

3 研究方法

(1) 対象とする単元

5年総合学習「新潟の魅力 再発見」(全70時間)

(2) 話し合いの手法について

モデレーションを使用した。モデレーションという語は、小学校学習指導要領総合的な学習の時間 解説編では、「児童の学習状況を的確にとらえるために、評価の解釈や方法を統一するとともに、評価規準や評価資料を検討して妥当性を高めていくこと」と示されている。

また、佐藤・香田(2015)は、モデレーションについて「調整」と定義し、山田ら(2015)

は「評価基準や調査結果を複数の評価者間で調整する作業」と定義している。これらの先行研究や指導要領を参考に、本研究ではモデレーションを「目指す子どもの姿や、育まれつつある児童の資質能力の評価について複数の評価者間で調整し妥当性を高めるとともに、その手法、次の活動を構想する話し合い」と定義する。

(3) モデレーションを入れるタイミングと内容

本単元を進めるにあたっては、まず、計画段階のモデレーションとして、年度初めの単元全体にかかわる段階で3回行う予定をした。これら3回のモデレーションでは、子どもに付きたい資質・能力が備わった高学年の具体的な姿、評価規準、アンケートの項目の選定の順でモデレーションを行うように計画した。この3回は単元の見通しをつくるためである。

次に実践段階では、単元の活動が進む中で、必要な話し合いのタイミングを見ながら探究のプロセスの課題設定が始まる前にモデレーションの場を設けることを想定した。

事前に計画段階で話し合われた内容を基に、それぞれのプロセス1セットで目指す姿(評価)、学習活動、目指す姿に迫る活動等について項目を立てる内容で構成している。ここでの教員との協議などを基に、共通理解することが必要な内容の枠組みを筆者の方で「共有フォーム」として作成し、このフォームを使用してモデレーションに臨むようにした。

(4) モデレーションの方法

モデレーションは3つの段階に分けて行う。
第1段階：筆者が活動の計画・評価の基になる資料を作成する。
第2段階：作成したものを学年会等の機会、学年の職員で検討する。
第3段階：検討内容をもとに筆者が計画や評価規準に反映させる。

(5) 研究の評価について

年間を通して教員間で話し合う機会（モデレーション）をもち、その際の発話記録や進行記録を基に検討する。具体的には、モデレーションにより協議を繰り返すことで教員の子どもに付けたい力や総合的な学習の時間に対する考え方の変容に注目する。その際は、主に総合のカリキュラムの計画・評価・修正に関する内容に注目し変容を捉える。また、すべてのモデレーション後に教員のカリキュラムに対する意識の変容や、モデレーションの感想等について聞き取り調査を行うこととする。

また、付けたい資質・能力（本実践では、自己肯定感と地域への愛着）に関する児童アンケートを事前事後にとり、その数値の推移も見る。

4. 研究の実際

(1) モデレーションの検討内容について

単元を進める中で実際に行った6回（計画段階3回、実践段階3回）のモデレーションの検討内容を表1に示した。3回目は提案に対し職員から付箋で意見をもらい、それ以外は学年会の形式で行った。学年会とは、5学年担任をしているが4人の教員が対面で話す場のことを指す。筆者からの提案に対して、直接協議できない場合（3回目）は筆者が作成した検討資料を職員室内学年掲示板に掲示し、付箋を貼る期間を1週間程度設けて各教員の考えを表してもらえるように評価を依頼した。

表1 モデレーションの検討内容

N o.	日付	段階	検討内容
1	4/12	計 画	付けたい資質能力が備わった学年の具体的な姿
2	4/18	計 画	付けたい資質能力を加味した単元の評価規準
3	4/27	計 画	児童の実態・目指す姿と評価規準から、向上をねらう事前アンケート（東京都教職員センターより）の項目の選定
4	5/9	実 践	年間指導計画の活動内容と、選定した事前アンケートの項目をどう結び付けるのか検討（探究のプロセス1回目について）
5	10/25	実 践	1回目の評価と、年間指導計画の活動内容と、選定した事前アンケートの項目をどう結び付けるのか検討（探究のプロセス2回目について）
6	12/22	実 践	2回目の評価と、年間指導計画の活動内容と、選定した事前アンケートの項目をどう結び付けるのか検討（探究のプロセス3回目について）

(2) 具体的なモデレーションの様子について

本実践では、全体で6回のモデレーションを行った。モデレーションの事前事後で変容がみられた部分を中心に、計画段階と実践段階で1回ずつ、計2回の具体を提示する。また、実践段階に入る前の共有フォームの作成についても詳細を記載する。

① 計画段階1回目のモデレーション

日付	4月12日
形式	学年会
検討内容	自己肯定感をもった高学年の総合学習におけるゴールの具体的な姿
筆者が提案した内容	
○高学年として自己肯定感が身についた姿を以下のように示した。 【自分らしさを発揮するとともに、周りとは異なる考え方や得意なこと等を大切にして表現できる】	
学年での検討の様子	
<ul style="list-style-type: none"> 自己肯定感が高い子どもとは、みんなの前で発言ができる子。失敗を恐れないとかそういうこと。うちのクラスの子は、しゃべる内容はとりあえずとしても、手が挙がらない。それを何とかしていきたい。(教員A) 自己肯定感が高い子は、その場の空気を遮ってでも発言したり、同意できないことに対して反対意見を言えたりする子ども。(教員C) 何をしてももう自分からあれやりたいこれやりたいと言えるクラス。うちのクラスは割とそういう力が育っている。失敗していても失敗だとは思っていない。自分で選ぶ力は備わっていると感じる。(教員B) 自己肯定感として、自分のことに自信をもつだけでなく、周りを受け入れる力が育たないと高学年はダメだと思う。(教員A) 	
検討後に修正された内容	
○検討を経て、以下の箇所を修正した。 【自分で選択し、意思表示ができるとともに、周りとは異なる考え方や得意なこと等を大切にして表現できる】 【同じ事柄でも、いろいろな考え方・感じ方があることを理解し、互いに調整して、よりよい活動を考える大切さに気付く】	
計画段階1回目の考察	
筆者が提案した「自分らしさを発揮する」という言葉に対して、自分らしさを発揮するよりも、自分の意見を大切にしながら選び、伝える力の方が大切だという結論になった。資料を提供したことで、学年会の教員は自分の考えや経験と比較しながら話すことができ、具体的な場面を言葉で確認しあいながら検討していることが分かる。 また「自己肯定感」と一口に言っても、担任それぞれが思い描いている子どもたちの姿は	

違っていた。このような状態で、「自己肯定感を高めた子」とだけ目標を設定していたら、目指す子どもの具体的な姿は担任によって変わっていた可能性があることから、このモデレーションの機会は教員間の認識をそろえる上で重要であった。

② 「共有フォーム」の作成と実践段階1回目のモデレーション

以上のような計画段階の3回のモデレーションを通して、筆者の方で、協議を行う際に教員間の共通理解が必要と考える内容を基に、共通フォームの枠組案を作成した。共有フォームに必要と考えた項目は、主として取り組む項目(アンケート項目)、目指す子どもの姿、学習活動、アンケート項目を意識した活動、改善点である。実施段階では、この「共有フォーム」を用いてモデレーションを行い、改善を図った。

日付	5月9日
形式	学年会
検討内容	年間指導計画の活動内容と、選定した事前アンケートの項目をどう結び付けるか
筆者が提案した内容	

項目	目指す姿	学習活動	項目を意識した活動
人と違っていて自分か正しいと思うことは主張できる	二者との相違を意識しながら発言している。	新島町の魅力発信の仕方や課題について、県庁の方から話を聞く	〜さんと同じで、似ていて、違っていると意見を付け加えながら発表する。
私は自分の判断や行動を信じる事ができる。	自分の意見を同じグループの友達に伝えることができる。	新島町の魅力発信の仕方や課題について、県庁の方から話を聞く	発信について大切なことについて、友達と対話を用いて協力してまとめる
私は自分のことは自分で決めたいと思う	自分の意見について、自分でできることを考えて振り返っている。	新島町の魅力発信の仕方や課題について、県庁の方から話を聞く	話を聞いて、自分がどうしていきたいかという視点をもち振り返りを書く
地域の人と活動することで、新しいことを知ることができる。	振り返りに自分が新しく知ったことを書いている。	新島の魅力について、保護者や地域にアンケート調査を行う。その結果を発信の仕方や課題について、県庁の方から話を聞く。	新しく知ったことという視点で振り返りを書く。
自分が住んでいる地域をよりよくしていくために行動したい	魅力の発信について、自分でできることを考えて振り返っている。	新島町の魅力発信の仕方や課題について、県庁の方から話を聞く	話を聞いて、自分がどうしていきたいかという視点をもち振り返りを書く

- ・項目を意識した活動とどんな姿を目指せばいいのか分かりやすい表になっているので、評価がしやすい。(教員C)
- ・地域の人と活動するのところは、振り返りの内容の中に「地域のことについて」という言葉があるとよりアンケートの項目の数値向上に近づくと思う。(教員B)
- ・表として目指す子どもの姿があるのはいいし、このままでもいいとは思いますが、本時レベルの実際の評価で考えると、どんな言葉があればその姿を達成したといえるのかそこが結局大切。特に経験が浅い先生はその具体があるとありがたいと思う。(教員A)

- ・確かに子どもの「姿」のままだと、結局教員裁量に任せられるというところに落ちていってしまうかもしれないですね。(教員B)
- ・表に入らないけど、振り返りで評価するなら授業の時にそれがあると助かる。(教員A)

検討後に修正された内容

項目	目指す姿	学習活動	項目を意識した活動
人と違っていて自分か正しいと思うことは主張できる	二者との相違を意識しながら発言している。	新島町の魅力発信の仕方や課題について、県庁の方から話を聞く	〜さんと同じで、似ていて、違っていると意見を付け加えながら発表する。
私は自分の判断や行動を信じる事ができる。	自分の意見を同じグループの友達に伝えることができる。	新島町の魅力発信の仕方や課題について、県庁の方から話を聞く	発信について大切なことについて、友達と対話を用いて協力してまとめる
私は自分のことは自分で決めたいと思う	自分の意見について、自分でできることを考えて振り返っている。	新島町の魅力発信の仕方や課題について、県庁の方から話を聞く	話を聞いて、自分がどうしていきたいかという視点をもち振り返りを書く
地域の人と活動することで、新しいことを知ることができる。	振り返りに自分が新しく知ったことを書いている。	新島の魅力について、保護者や地域にアンケート調査を行う。その結果を発信の仕方や課題について、県庁の方から話を聞く。	新しく知ったことという視点で振り返りを書く。
自分が住んでいる地域をよりよくしていくために行動したい	魅力の発信について、自分でできることを考えて振り返っている。	新島町の魅力発信の仕方や課題について、県庁の方から話を聞く	話を聞いて、自分がどうしていきたいかという視点をもち振り返りを書く

実践段階1回目の考察

今回のモデレーションでは、表の内容自体が大きく変化したわけではないが、繰り返しモデレーションを行っていくことで、参加している教員は、評価の具体を求めるようになった。このことから、総合学習において各教員が統一して評価ができるようにすべきだという考えをもっていることが分かる。これ以降のモデレーションでも、同じ評価規準や、同じ評価資料を使用し評価をしていくといことにこだわるのが予想され、目指す子どもの姿の達成まで評価がぶれることなく行えるのではないかと期待をもった。

これ以降2度の実施段階のモデレーションを重ね、このような共有フォームを基に協議し、複数教員の共通理解を基にして修正(改善)を進めることで、各教員の理解が進み、焦点化した議論に結び付くのではないかと推察された。

5 研究の評価

(1) モデレーションを行うことによる学年教員や子どもの認識

① 教員の認識の変容

モデレーションを活用した総合学習の時間について、協働して取り組んだ学年教員3名に対し、聞き取り調査を行った。質問は、「今年度のモデレーションの反省や今までの総合学習の時間の運営との違い」、「来年度以降のモデレーションの活用できるかどうかについて」である。結果を表にした。

教員 A	どのタイミングで、どこを見るのかを統一できたので、学年会でのモデレーションも同じ土台に立って話ができているという実感がもてた。何よりも、子どもの変化を感じられることができたのがよかった。
教員 B	ところどころで先生方と評価や活動について共通理解を図ることができたのはありがたかった。こんな姿が見られれば OK っていうのがモデレーションの表にあったので、自分ならそこにどうもっていくかと考えながら授業をすることができた。
教員 C	経験が浅いので、とくに評価について共有できたのはよかった。昨年までとは違い、はっきりとゴールが示されている今年授業をしやすいかつたし、子どもへの声掛けもしやすかつた。

学年の教員の聞き取り調査から、すべての教員が計画や評価方法を共有したことについて好意的な感想をもっていることが分かる。また、テスト等で数値化して評価をすることができない総合学習に、モデレーションによる計画や評価の共有は、自身が授業を行う上での明確な指針となっていると考える。

② 4月と12月末の児童アンケートの数値の推移

5学年児童133名に対し、付けたい資質・能力である「自己肯定感」と「地域への愛着」に関してのアンケート調査を、総合学習の単元開始の前と後に行った。5年生125名全体の平均値を算出した（令和4年4月）と事後（令和5年1月）の平均値を比較した。対応のあるT検定を行い表2に示した。

表2 アンケート項目及び結果

質問項目	資質・能力	事前 4月	事後 12月	有意差
人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる。	自己肯定感	3.02	3.29	$\rho < 0.05$
私は自分の判断や行動を信じていることができる。	自己肯定感	3.10	3.26	$\rho < 0.05$
私は自分のことは自分で決めたいと思う。	自己肯定感	3.56	3.72	$\rho < 0.05$

地域の人と活動することで、新しいことを知ることができる。	地域への愛着	3.59	3.50	n. s
自分が住んでいる地域をよりよくしていくために行動したい。	地域への愛着	3.68	3.61	n. s

自己肯定感に関する3項目については、数値の向上が見られた。具体的な子どもの姿を教員間で共通理解しモデレーションを行い、評価方法の具体を学年担任で共有し実践したことが数値の向上に貢献した可能性はある。また、総合学習の活動が終わった際に記述した児童の振り返りを確認すると、自己肯定感の向上とも受け取れる記述は26名（5年児童数140名中）確認できた。モデレーションで付けたい力と評価を学年教員が共通理解をして総合学習を進めたことは、子どもたちの主体的な活動を支援でき、結果として自己肯定感向上に影響を及ぼした可能性が考えられる。

3章の児童のアンケート結果では自己肯定感のみ事前事後で有意差が認められたとなったが、各モデレーションの発話記録や進行記録をたどると目指す子どもの姿や現在の子どもの姿を基に評価や活動を決めていく教員の姿が見られた。

6 今後の展望

本実践を通して、共通の枠組みに基づいて協議を繰り返すモデレーションは教員の意識をそろえる良さがあつた。

一方で、準備や協議に係る労力と時間をどのように軽くするかについては課題が残つた。とりわけ、準備や運営に係る労力と時間節約の工夫が必要である。資料提示や検討内容の焦点化を図り、学校で統一すること、学年で統一すること、学級裁量でおこなうものを明確にしていくことが必要である。

参考文献

- ・佐藤真・香田健治「総合的学習におけるモデレーション研修に関する研究：観点「課題見つける力」のルーブリック開発を通して」2015
- ・山田嘉徳 森朋子 毛利美穂 岩崎 千晶 田中俊也「学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討」2015
- ・文部科学省『小学校学習指導要領総合的な学習の時間解説編』2019